

2024年10月18日

## ウッドデザイン岡山視察会報告

一般社団法人日本ウッドデザイン協会  
事務局

### 【開催概要】

内 容:岡山県(真庭市・西粟倉村)におけるウッドデザイン賞受賞作品他の視察  
日 程:2024年9月26日(木)~27日(金)  
主な視察先:岡山大学、蒜山そばの館、GREENable HIRUZEN、木テラス、銘建工業株式会社、西粟倉村役場、株式会社ようび、株式会社 西粟倉・森の学校  
参 加 者:33名  
企 画 運 営:日本ウッドデザイン協会事務局(ウッドデザイン賞部会)



### 【目的】

地域の森林資源の活用に明確なビジョンをもつ岡山県(真庭市、西粟倉村ほか)の建築・木材関係者と会い、森林循環・SDGs 取組みの先行事例を学習することを通じ、会員のビジネスに活かす「気づき」を得る。

岡山県の豊富なウッドデザイン賞受賞作品を視察することにより、地域産材や CLT の活用や価値向上の可能性について知見を高める。

## 【スケジュール】

月日	時間	行程表	
9月26日	9:20	岡山空港発(協会手配バスにて)	
	9:55	集合 岡山大学	
	10:00	岡山大学「共育共創コモンズ」 (2023年WD賞受賞作品)	清水建設様 解説付き視察
	10:45	集合(蒜山視察からの参加者)岡山大学	
	12:15	蒜山「そばの館」にて昼食 (2023年 大阪・関西万博特別賞(国際博覧会担当大臣賞作品))	真庭観光局解説付き
	13:10	蒜山 GREENable HIRUZEN「CLT PARK HARUMI」 (2020年 優秀賞(林野庁長官賞)受賞作品)	真庭観光局解説付き視察
	14:20	銘建工業様 CLT工場、本社新事務所、大断面工場	銘建工業様 解説付き視察
	16:30	真庭市役所様 市の取組み紹介	
	18:00	ホテル着	
9月27日	8:00	貸切大型バスにてホテル出発(7:50集合)	
	9:00	西粟倉村役場	西粟倉村の取り組み紹介と 受賞作品の説明付き視察
	11:00	ようび ・「株式会社 ようび」(2015年 WD賞受賞作品) ・「ヒノキウィンザー」(2015年 WD賞受賞作品)	説明付き視察
	12:15		
	13:30	「森の学校」 ・エーゼロ 木材工場 ・「「みんなの材木屋」発 森と暮らしを創る六次産業化モデル」 (2015年 最優秀賞(農林水産大臣賞)受賞作品) ・「ヒトテキマット」(2015年 WD賞受賞作品) ・「ユカハリ・タイル」(2015年受賞作品)	説明付き視察
	14:45		
	16:15	姫路城	
	17:00	JR姫路駅 解散	

【視察先】視察 1 日目 9 月 26 日(木)

## 1. 岡山大学共育共創コモンズ(OUX:オックス)

岡山大学 HP [国立大学法人 岡山大学](#)

2023 年ウッドデザイン賞 受賞作品

2023 年度グッドデザイン賞/第 57 回日本サインデザイン賞 中国地区デザイン賞

令和 5 年度木材利用優良施設等コンクール 内閣総理大臣賞/日本空間デザイン賞2023

/サステナブルデザイン賞/令和 5 年度岡山市景観まちづくり賞

設計・施工:清水建設

監修・基本計画/隈健吾

岡山大学において、「地域の産業活性化のための新たな交流と共創の場」として計画された。岡山県の地域産業である木質材料 CLT を活用し、適用拡大に向けた技術開発により、CLT 建築の新たな可能性を体現する建物とした。計画～運用段階を通じた情報発信により、学生や地域、企業が地域産業を体感する空間を実現した。

岡山大学 木質構造設計研究室の福本晃治特任准教授より研究開発の発表を通じ、講堂の構造や OUX の構造の説明を受けた。



## 2. 蒜山そばの館

2023 年大阪・関西万博特別賞（国際博覧会担当大臣賞受賞作品）

建築主	真庭市
建築設計者	STUDIO YY
構造設計者	山田憲明構造設計事務所
施工者	森本組
木工事	銘建工業



第三セクターが運営する飲食店で、2020年に店舗が焼失した後、真庭市が再建に乗り出し、新たな魅力の発信場所として、地域の伝統的な入母屋造りを地域産材のCLTで構成した。蒜山蕎麦の風土と文化と資源の発信により、観光客だけでなく、蕎麦のコアなファン、また地域住民のコミュニティ場所として来客数も増加。

➤入母屋造りと寄棟造の屋根の美しさ内部からも本を伏せたような傾斜にランダムに組み合わされたCLTが美しく、空間の広さが際立つ。



➤大きくとった窓からは蒜山の山や田園風景が広がる。店内からも借景ができるよう、壁面を設けていない。暖簾の向こうの厨房にもこだわり設計しているとのこと。



### 3. 蒜山 GREENable HIRUZEN 「CLT PARK HARUMI」

[GREENable HIRUZEN\(グリーンナブルヒルゼン\) | 蒜山の観光スポット | 真庭観光WEB](#)

2020年 優秀賞 (林野庁長官賞)受賞作品

三菱地所 株式会社(東京都) / 株式会社 三菱地所設計 (東京都) / 株式会社隈研吾建築都市設計事務所 (東京都)



真庭市のサステナブルな価値発信拠点としてオープンされたのが「GREENable HIRUZEN (グリーンナブル ヒルゼン)」。その価値を発信する象徴としてそびえたつのが、2020年ウッドデザイン賞優秀賞(林野庁長官賞)を受賞した「CLT PARK HARUMI」。

CLTを活用することで、林業・木材産業の活性化、CO<sub>2</sub>の排出削減や森林保全にも貢献。また、真庭市は端材や林地残材を発電燃料として資源化し、地域での回る経済循環を実現。

そんな回る経済の紹介や自然共生を紹介するために阪急阪神百貨店とともに設立されたビジョン発信の拠点。

➤2021年に世界公募で選ばれた

パビリオン名は『風の葉』。CLTのパネル360枚を使い、直行集成材・CLTの木目の美しさが風に舞う木の葉のような印象を与えているファザード。風や森を感じて癒されるようデザインされている。



晴海でお披露目した建築物をまた解体し、建て直すというアップサイクル事例としての価値を発信している。

2019年に東京・晴海で開催した真庭産を用いたCLTでの地方創生プロジェクト『蒜山⇄晴海プロジェクト』で使用されたものが1年の運用を終え、真庭市に里帰りし、都市部と農山村部を結びつけるシンボルとしている。



## サイクリングセンター

蒜山は萱の名産地でもある。

昔は争いもあったほどという良質の萱の山焼きの伝統がまだ行われており、日本の文化財としての価値の発信場所として使用。農作業用としてだけでなく、インテリアとしても普及するように店内にも萱を使用し、デザインされている。

サイクリング人口も多いため、観光案内デスクが設けられ、休憩所としても活用されている。



## 蒜山ミュージアム ビジターセンター・ショップ



テーマは「人と自然の共存が体感できる文化・芸術」。サイクリングセンターの茅葺に対し、CLTのピースを重ね合わせ軒をデザイン。日本の伝統建築を現代風にデザインされている。



ミュージアムでは、隈研吾の設計思想の企画展や地元アーティスト、現代アートの展示などを開催。地域住民から観光客まで幅広い来訪で交流の活性化する場として活用されている。

また、ビジターセンター・ショップでは、JAPAN ブランドの地域事業者の製品や地域のアーティストの製品をはじめ、世界中の企業と連携し、サステナブルな暮らしに価値をプラスする商品を販売。アンテナの高い若者が市内外から訪れるとのこと。



#### 4. [木テラス\[KITERASU\] 一久世駅 CLT モデル建築物](#)

2017年 ウッドデザイン賞受賞作品

中国建築文化賞 2020 意匠部門/JIA 中国建築大賞 一般部門特別賞

設計監理:小原賢一+深川礼子/ofa

構造設計:有限会社桃李舎 榎田洋子、濱田たえ子

設備設計:長谷川設備計画 長谷川博

施工:株式会社松岡建設



女性建築士を対象とした設計コンペで建築された「木テラス[KITERASU]一久世駅 CLT モデル建築物」もその一つで、2017年ウッドデザイン賞を受賞しており、駅前のパブリック空間を CLT で表現したユニークさを評価されている。

通常駅前の公衆トイレというと暗く視覚的なことでマイナスイメージを持たれがちなところを、桜をめでもられる空間として、また、サイクルステーションや腰かけのある休憩スペースを設け、街のコミュニティの場のひとつとしてデザイン。

本来避けられる木目の多い部材に壁の孔の構成が特徴。

木材も技術もある街、真庭市の魅力を CLT の特性を生かして表現。日常に温かみを添えている。

(車中見学)

## 5. [銘建工業株式会社](#)

CLT 工場、本社新事務所、大断面工場 見学



CLT の国内の 4 割を超えるシェアを誇る。工場は現在依頼のある特別な製材もあるため公表はできない場所でもあるが、通常の製材から様々な企業から依頼があった製材まで並ぶ工場の全工程を見学した。

木質構造事業部長宮竹靖氏と木材構造事業部営業部主任の森田聖氏の 2 班に分けて見学。

乾燥からあらゆる、製材の加工、グレービング、プレスの工程をご案内いただいた。

CLT は集成材と違い、出口が少ないので管理しやすいとのこと。



安価な外国産材に押され、廃棄が増える国産の杉の活路を見出すためにいち早く CLT 製造に取り組み、今ではほぼ国産の木材を加工している。

製材はやっていないので板から加工することがメイン。



### ➤バイオマス発電所

木材、木くず、林産廃棄材、このあたりの地域で余ったものを燃やし、工場の乾燥のためのエネルギーに使用したり地域の発電に使用。

当初は外材に押され、廃棄することが多かった地域産材や工場の端材をチップにすることが多く、自社工場で活用しよう取り組み始めたもの。今では町のエネルギー資源として回る経済の一環を担っている。



### ➤本社見学

CLT と集成材を使って分散した事務所を一か所に集めるために新築した本社ビル。

コンペのアイデアをもとに若手社員中心にチームを作り設計。

外壁の褐色は自然色であり、建材とした経年経過を観察している。

CLT で建築したことにより、高い断熱・気密性を実感した。結果的にエネルギーロスが 3 分の 1 に軽減されているとのこと。



### ➤すべての環境負荷を算出し表記

銘建工業は環境負荷に対しての意識が高く、CLT 工場としては日本でいう JAS と同じような ETA(Europe Technical Assessment) という欧州技術認証を取得している。

今後、製材である CLT に通常の CO<sub>2</sub> の固着という数字で算出していたものを、さらに製造過程で出る CO<sub>2</sub> 排出量も規定化し、一般社団法人サステナブル経営推進機(SuMPO)で業界初となる登録し、製造から製品になるまでの正しい計算方法で CO<sub>2</sub> 固定量を算出し表記し、情報開示する予定。



### ➤大断面工場見学



日本の森林・林業の社会問題の解決のためにいち早く CLT の製造に着手した銘建工業。本社社屋を設計・施工したことで、断熱・耐火・耐震の CLT 建築の良さを実感するとともに、建築材としての取り入れやすさや扱いやすさも実感したという。次世代への普及啓発として CLT 建築のコンペなどを開催し、国産材利用の機会創出、木造建築物設計への関心を高め、次世代育成および国産材利用を普及していく予定。

### 6. 真庭市市庁舎及び市長説明会

[真庭市公式ホームページ トップ](#)



真庭市は人口約 4.3 万人、東京 23 区の人口の 0.4%ながら面積は 23 区の 1.3 倍、市域の 8 割が森林の日本有数の木材集積地の真庭市。蒜山高原や湯原温泉などを有し、年間約 250 万人が訪れる観光都市で、2005 年に 9 か町村合併により真庭市になり今年 10 周年を迎える。

この日は、太田昇真庭市市長に、市の全体像についてレクチャーを受けた。



➤CLT の街・真庭を象徴するように市庁舎は CLT で木質化されている。什器やイスなど CLT で作られている。

2013 年に林業・木材産業関係事業者も含む 9 団体によって「真庭バイオマス発電株式会社」が設立され、「木を使い切るまち」として山主にも還元される仕組みが作られている。「バイオマス発電」と「CLT 建築促進のための助成」の 2 本柱で地域材を活用し、地域経済循環を実現している。



➤バイオマスエネルギーセンター真庭の経済循環を実現させたバイオマスエネルギー。センターの裏手にあるボイラーも樽のようなデザイン。

#### 【1 日目総評】

真庭市の視察では早くから地域産材の活用の可能性を見据えた CLT という最新の木質材料の生産や、技術研究、普及などを学び、CLT の特性を生かした建築物の設計・施工への採用の手法を学習した。実際の建築物から木の経年変化やデザインへの落とし込みの工夫、構造への反映の余地などを見学した。また、林業事業を中心とした経済循環を学んだ。

【視察先】視察2日目 9月27日(金)

## 7. あわくら会館建設プロジェクトを中心とした百年の森林(もり)構想の展開

2021年 ウッドデザイン賞受賞作品

建築主 西栗倉村

建築設計 アルセツド建築研究所  
倉森建築設計事務所

構造設計 山田憲明構造設計事務所

設備設計 ZO 設計室

外構設計 エキープ・エスパス

施工 梶浦建設株式会社、中電工、銘建工業、ダイテック

HP:[西栗倉村『100年の森林構想 2.0』](#)



西栗倉村の庁舎と生涯学習施設が有機的に一体となった建築。「百年の森林構想」と起業型人材育成を中心とした地域づくりの村で、村産材活用と村内事業者群の円滑な協働のためのプロセスで村産材率97%を達成した。



多くのワークショップを行い、また村産材に相応しい架構、耐力壁の開発により、村民や役場の多様な活動に柔軟に対応できる一体型の「場」を計画した。

会館には役所機能のほか、図書館や集会場がある。(HPより抜粋)

## 8, 森と共に自立を目指す、百年の森林(もり)構想とあわくら会館建設プロジェクト

### 2021年 ウッドデザイン賞受賞作品

#### 生きるを楽しむ村

「平成の大合併」を拒否し、自主自立の道を選択した西栗倉村。2058年に「上質な田舎」になることを目指した「百年の森林構想」を着想し、多様なローカルベンチャーと協働して森林の集約化による適正管理と木材の付加価値化に挑戦している。

また、再生可能エネルギー導入にも積極的に取り組み、低炭素な地域づくりと地域内資源循環を起こしている。



森林資源をデッドストックにしない取り組みとして15年前より「百年の森林構想」を計画。林業・木材加工事業売り上げは1億円から12億円に増加、二酸化炭素削減量は年間3,150tだという。



➤ 議会でも使用する会場。



➤ 記念撮影

人口1400人の村の「百年の森林事業」の仕組みについて参加者から質問が多数あり、また、実現に向けた独自の構想について感心の声が多く上がった。

森林とともに100年を生きていく...

その決意の象徴がこの西栗倉村「あわくら会館」。役場庁舎、議会兼ホール、生涯学習センターの機能を持つこの施設はほぼ西栗倉のスギ・ヒノキを使用している。





➤細い間伐材を組み合わせ作られた梁  
大空間と開放性を保っている。



➤川上から川下まで全て村の事業者。  
このロゴデザインも村のデザイナーが  
デザインしている。

▽ 関連資料について

<https://www.zck.or.jp/uploaded/attachment/4345.pdf>

## 9, にしあわくらほいくえん

2018年 ウッドデザイン賞受賞作品

設計 : スターパイロッツ

施工 : 重藤組

木材供給協力: 西栗倉森の学校

事業企画プロデュース・木材調達コーディネート

: NPO 法人サウンドウッズ



『森林(もり)の中で未来に向かう子どもたちの“きらきら”を大きくはぐくむ』という  
保育理念に沿い、小径の村産材の特徴を活かしながら 100%村の木で作られた  
村唯一の保育園。

『100年の森林(もり)構想』に基づき、森林整備で出た木材や間伐材を利用した  
木材調達。

園で使用するエネルギーも、夏は井戸水で、冬はバイオマス発電で賄っている。

サインや家具も村の事業者で協議し、まだ言葉も文字も理解がない0歳児から、村の  
豊かな自然を遊びながら感じてもらえるデザインが考えられた。

➤保育園のリーフレットから  
わくわくする仕組みを紹介。  
建築の際のこだわりを紹介すること  
で、森林(もり)を生きる村の取り組み  
の入り口をつくる。



また、この日は内部の見学はできなかったが、  
この施設のために考えられた  
『100年のもりタイル』は、他の施設に採用  
されるたびに一部が村の森林環境保全に  
寄付される仕組みになっている。



外部からの移住者も多く、子育て世代の  
コミュニティの場としても活用される集会場も  
設けられている。



保育園建設の際は、年長保育の子どもたちや  
保護者達も参加。見学も園づくりにも参加して  
作り上げられ、森林・林業を中心とした街づくり  
に参加してもらうことで次世代が多様な視点で  
感じながら育つ仕組みづくり、この村で  
しかできない子育てを村ぐるみで実践している。

## 10. [道の駅あわくらんどトイレ](#)

2018年 ウッドデザイン賞受賞作品

計画検討 CLTモデル建築物構造検討委員会  
基本計画・設計監修 岡山県 CLT 建築開発検討会  
(デザイン協力) 岡山理科大学工学部建築学科弥田俊男研究室  
実施設計・工事監理 (株)倉森建築設計事務所  
(構造設計) (有)西建築設計事務所  
施工 鷺田建設(株)



CLT の可能性の認知と CLT 建築設計の人材育成を目的として全国の学生を対象に行われた「おかやま CLT 建築 学生デザインコンペ 2015」の最優秀賞「そらみるトイレ 拡張されるプライベート」を参考に設計されたトイレ。

CLT の美しい木目が特徴的で、遠くからでも視覚的にわかるようにサインは大きく掲示。中央はベビーカーや車椅子などを使用しても余裕をもって通り抜けられるよう広く、混雑時でも通行しやすい。

各所外部の坪庭から自然光が入りやすいようになっており、柔らかい木のぬくもりを感じ、快適さと使いやすさを工夫している。

トイレブースも様々な世代、用途に合わせ工夫されており、ウォシュレットもボタンを押すたびに発電するようになっている省エネ対応。その電力もまたバイオマス発電を使用しており、森林資源利活用モデルとして、国内だけではなく、海外からの旅行者がわざわざ訪れるという。

CLT 建築の設計・技術シンボルとして、また、地域森林資源循環モデルとして見学者が後を絶たないとのこと。トイレとしても圧巻な建築物です。

➤CLT パネルを自由な角度で  
組み合わせることで自由な空間を構築。



➤道の駅あわくらんどからトイレへ続く川沿いの  
小路は約 1600 個の風車が並ぶフォトスポット。  
木の遊歩道には木製ベンチが設置されており  
ここにも地域材が使用されている。  
木回廊の改修担当は地元事業者である  
株式会社ようびが担当。



## 11. [株式会社 ようび](#)

2015年 ウッドデザイン賞受賞作品

## 12. [ヒノキウィンザー](#)

2015年 ウッドデザイン賞受賞作品

「やがて風景になるものづくり」を理念として、地域の木材を活かした家具づくりからスタートした。東京はじめ移住者が多くいる会社。

もともと飛騨高山で家具職人をしてきた代表が、この西粟倉村の豊かな地域産材を活かし、難しいと言われていたヒノキで家具をつくることに目覚め移住したことがきっかけで設立された。

『100年の森林(もり)構想』理念に賛同し、森や木と向き合う活動に「ようび建築設計室」というチームをつくり幅広い活動に取り組んでいる。



➤木々が一本一本生えていて、虫たちが飛んでいて草木が生えていて命の集合体が“風景”である。

2016年に起きた火災で廃工場を利用してリノベーションした工房が全焼。西粟倉村の良質なヒノキなどを使って作ってきた家具が認められた矢先の火災であり、「ものづくりで未来を明るくする」というようびの再建には地域だけでなく、北海道から九州までの延べ600人以上の“ツギテノミカタ”により再建された。



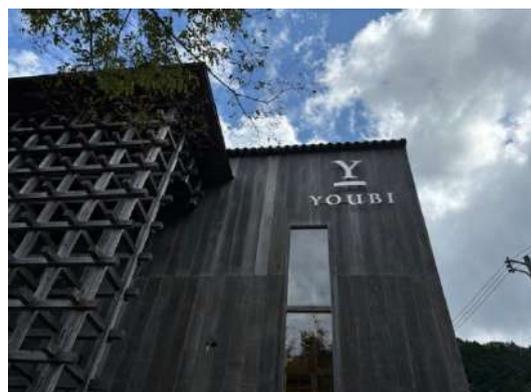
➤風景に溶け込む社屋

再建の際は、誰にも加工でき、誰でもくみ上げられる「みんなで作る建築」を考え5500本90mmのスギ材の角材を25,000箇所人の手できりかきを作り、ひたすらレゴのようにくみ上げ作り上げた。  
半分くらいの部材は足場板などアップサイクル素材でまかない、意匠であり構造である特殊な建築でもある。



➤神社仏閣に近いつくりの本社建物

➤コーポレートロゴの下の線は  
ひとのご縁の中のひとつを担当させて  
もらうという意味がある。





➤社屋の中からも自然との一体感が感じられる

「オープンファクトリー」と名付けられた  
工房。フォスピタリティーを大切にする  
家具作りをモットーとするため工房内は  
開放的で仕切りをつけず、職人が明るく  
前向きに取り組める環境を心掛けている。  
受注生産であるので在庫を持たない工場内  
は空間を取ることができ、常に職人にも安全な  
環境を保つことができるようになっている。



➤西粟倉のヒノキは白く柔らかく、加工するとなめらかで香りもよいことが特徴。

家具のデザインは AI などのデジタルファブリケーションも使うが、磨きや塗装などの仕上げに手作業で揺らぎを加えることで素材の良さを生かした温かみのある家具ができるとのこと。

「ようび設計室」は家具部門とデザイン部門と協働して進めるプロジェクトも多く、トータルデザインを可能にしており、家具と共に建築を考えられることが強み。古民家や廃屋などのリノベーションも手掛ける一方、新たにクライアントと一緒に作り上げていくプロジェクトも多い。

株式会社西粟倉森の学校からも部材を仕入れているが決して依存するわけではなくそれぞれがやりたい方向で進んでいるが、結果どこかで手を組みよい循環を生める関係性が作られているそう。

森のものを取り入れ地域の循環の中で共存していくことで、持続可能であることにこだわりをもった設計やものづくりを心掛けているという。

ローカルベンチャーの聖地ともいわれる西粟倉。環境を残しながら自分たちの暮らしも成り立たせる。自然を管理しながら情報をまとめ上げることで森林の再生を成り立たせ、価値化し、経済循環を回して行くことが成立しているので魅力ある村が作られ若者が注目している。新しいものがやがて風景になり、そこに営みがある。社員同士で昼食を作りともし、休日は畑をやってみたりと社員そのものもその風景に溶け込んでいることが、また新しい「場」を作り出す原動力になっている。



### 13. [「みんなの材木屋」発 森と暮らしを創る六次産業化モデル](#)

2015 年 最優秀賞(農林水産大臣賞)受賞作品



ウッドデザイン賞設立の年の農林水産大臣賞受賞の株式会社 西栗倉 森の学校。

9年の歳月を経た今を視察した。

まずは工場の視察。

西栗倉で切り出された丸太を加工している。



製材の機械はだれでも操作できる  
西栗倉の働き方にあった仕様を  
機械メーカーに開発してもらったと  
いう。同モデルを販売することで  
初期投資の負担を軽減したそう。

株式会社西栗倉・森の学校では、地域産材を製材、販売するだけでなく、商品を企画・販売・マーケティングも行っている。

森の再生には、新商品を生み出すだけでなく、企業の商品開発なども行っており、今まで外材合板で作られていた商品などに対し西栗倉産スギなどを活用した商品を提案、販売ルートを広げている。



➤無印良品など無垢材にこだわりを持っている、西栗倉・森の学校の理念に共感してくれる企業がクライアントとなっている。



2022年には周辺の農家の野菜やコメをつかったレストラン兼可能性を発信する、可能性発信基地「BASE101%-NISHIAWAKURA」をオープン。地域の農作物やジビエを使ったランチを提供するレストラン、自社栽培のいちごや特産物を活かしたスイーツを提供するカフェ、収穫体験のできるビニールハウス栽培の完熟いちご栽培、DIY用アウトレット木材販売やオリジナル商品の展示販売、周辺のクラフト作家や芸術家の製作のセレクトショップ、自然耕法で生産した自然米の販売、ペットOKのテラス席の設置など、住人も来訪者も気軽に訪れやすい店舗づくりになっている。



打合せやリモートワークに対応した店内フリーWi-Fiの完備や電源の設置など、様々な機能を持たせることで、近隣住人だけでなく二拠点ワークの感度の高い人材が集い、新たな事業につながりが生まれる拠点にもなっている。





森林・林業の循環だけでなく地域資源循環を利用し、農業や観光も含め、西粟倉で生活を営める取り組みを展開している。

木くずは木材の乾燥用の燃料にして再利用するなど、バイオマスエネルギーにも取り組んでいる。



地域の経済につながるような木材の加工・流通だけでなく、自然の豊かさを感じてもらうための米作りや完熟いちご栽培。田んぼを作ったことで生き物が増えたという。

株式会社西粟倉 森の学校は、自然と関わりながら事業をどう展開できるか、社会課題に取り組めるか、という点で注目されており、報告書をあげているという。

企業の研修なども事業手して展開しており、自然に身をおいてもらいリアルな体験をしてもらっていて、机上だけで考えるのではなく、実際に来て感じてもらう研修も活用してもらいたいという。

- 販売するウナギ事業について  
採算性について質問があった。  
ウナギ事業とジビエ事業を組み合わせ  
て全体を考えているという。



5年後の自分たちを考え、事業展開を構築していくことを繰り返している。

林業から、農業から、ローカルベンチャーから、などの方向で事業を考えているが、関わる人を増やすことが目的であり、

- ① 専門家と顧問契約を結ぶこと
- ② 寝ても覚めてもそのことを考えられる担当者がいること
- ③ 3年後までつづけられる資金体制が社内にあること

が事業開始の条件だという。

西粟倉村での『100年の森林(もり)構想』の原動力ともいえる2社がウッドデザイン賞受賞作品であり、今後自然循環をもとにした経済循環社会をけん引する注目の企業であった。加工流通事業の「ようび」「西粟倉 森の学校」などを始め、森林資源や自然資源を生かしたローカルベンチャーの集積地となって新たな価値を生み出し、ウェルビーイングの実現を可能としたことを学んだ。

以上